東坡、没す

東坡は、建中靖国元年（一一〇一）の正月に大庾嶺を越えた。かつて南に流されて通ったその道を、七年ぶりの北上であった。やがて虔州（けんしゅう）（江西省）に来て、江南の岸辺に響く鐘鼓を聞き「**帰り来たって夢自から驚く**」と詠じている。（次韻江晦叔二首 其二の二句）

しかし五月、常州（江蘇省）にたどり着いたが、大患をわずらって孫氏の館に臥す身となってしまった。

翌六月、老年なるをもって辞職願いを上奏して致仕したものの、病はついに癒えることなく、七月二十八日、波瀾の人生を閉じた。享年は、奇しくも師の**欧陽修**とも、政敵でありながら詩友でもあった**王安石**とも同じ、六十六歳であった。

二十一歳、東坡は官途を目指して、父の洵、弟の轍と共に都へ旅立った。進士に及第し、さらに二十六歳にして制科に応じ、鳳翔府簽判（せんぱん）として初の任官を果たした。しかし三十三年前、父 蘇洵の服喪ののち四川の眉州を離れてから、郷里、蜀の地にはついに帰ることがなかった。

東坡の旅、それは、新・旧法党の政争に巻きこまれ、志を得ぬまま中央と地方への転任、あげくは嶺南への流謫を余儀なくされた旅であった。その足跡は、東西そして南北へと中国のほとんど全域にまたがり、これほど広大な地を経めぐった詩人は東坡のほかには見られない。まさに東坡は、六十六年の **人生の旅** を終えたのであった。

病床には三人の子と家族がつき、その死を看取ったという。いま終焉の地、常州には、ゆかりの孫氏の館が残されている。

最愛の兄を失って、弟の蘇轍は任地の潁州から常州に駆けつけた。翌、崇寧元年（一一〇二）閏六月、汝州（河南省）に遺骸を葬るとき、長い「墓誌銘」を書いて哭している。

蘇東坡１００選石川忠久より抄出

東坡詩の影響

東坡が亡くなった一年後、「**元祐党籍碑**（げんゆうとうせきひ）」という事件がおきだ。元祐は、東坡が要職についていた、旧法党による政治が行われていた時代の元号で、石碑には、そのころの官僚三百余人の名前が刻まれており、いわばブラックリストにあたるものであった。名を刻まれたそれらの人、さらにその子孫をも、朝廷の官職につくことを永久に禁止するという、この時代をおおう党争のシンボルというべき事件であった。蘇家も当然その渦中に巻きこまれ、東坡の著書は禁じられ、生前の爵位は剥奪された。

やがて宋の混迷に乗じて北方で勢力を増した女真族の**金**が中原を制圧し、王朝は南に追いやられ、臨安（杭州）にて高宗が即位して南宋の時代に移ったのは建炎元年（一一二七）のことだった。こうした時の流れの中で、ひきつづき東坡は黙殺されるかたちになっていたが、彼の人柄、政治家そして文人としての真価は失われるはずはなかった。南宋の乾道六年（一一七〇）、孝宗は「文忠」の諡（おくりな）を賜り、東坡は「**蘇文忠公**」と称えられるようになった。実に、没後七十年にして名誉を回復したのである。

東披は、しばしばふれてきたように、幾度の危難に遭いながらも、自然と人間に対する信頼を失わなかった。彼のこうした人間性をうけて、その詩文は闊達であり明朗であった。警句に富みユーモアもあり、表現上では擬人法と比喩に優れ、さらには詞（つー）の詩境をひろげるなど、多くの特徴が見られる。

東披詩は、宋詩に一時期を画した。広い読者層をもち、蘇門四学士をはじめとして多くの文学者が門下につめかけ、東披は文壇の中心的位置を占めた。こうした門弟たちを通じて、後世の詩文、詞に与えた影響は大きい。

蘇東坡１００選石川忠久より抄出